

今回の教育実習で私が学んだのは「教員はずっと勉強しなければならない職業」ということである。多くの先生方が新しい知識や方法を学ぶために本を読んだり、勉強会に参加したりされていた。特に若い先生方よりもベテランの先生方の中にそういった姿を見たのが印象的だった。

実習中の授業で私が最も注力したのは元気さとメリハリだった。教員がいくら素晴らしい授業をしたとしても、生徒がそれを聞かなければ意味がない。生徒の雰囲気をよくするために明るく話をしたり、集中力を持続させるために定期的にはリラックスの時間をとったりした。そうすることで生徒の中にある英語の授業へのハードルを少しでも低くしたかったからである。これはある程度効果的だった。生徒の中には私の授業を楽しみにしてくれる者もいた。だが、このことが私をかえって冷静にさせた。自分は若い。それ故に生徒の注意を引きつけることができるのだということに気付かされた。歳をとったとき生徒たちを惹きつけることができるものが自分には何もないと気付かされた。また、たった2週間だからこそ差はそれほど開かないが、実習が1年続いたとして、自分が指導した生徒はどのような力をつけ、他の先生方が指導した生徒と比べて、どれほどの差がついているのだろうかと考えさせられた。自分は教える内容で精いっぱいなのに対して、どの先生方も授業で教える内容よりもはるかに多くの知識を持ち、そのうちのほんの一部を何らかの意図に基づいて精選していた。高校の英文法の参考書を理解していることは教員であるための必要条件ではあるが十分条件ではないのである。こうしたことを考える中で自分が勉強不足であり、教材研究が不十分であることに気付くことができた。研究授業に対する講評では自分の知識や英語への情熱の不足や発音などの基本的なことや活動内容に関して多くのご指摘を頂いた。どれも的を射たもので厳しいものも多かったが自分にとって足りていないものが何なのかがよく理解できた。また、私が意識した生徒の惹きつけに関してはよい評価を頂いた。自分の強みと弱点を同時に知ることができる貴重な体験だった。まだまだ学ぶべきことがたくさん残されていることは幸せなことであり、在学中にもっと勉強しようと思うようになった。

こうした体験から、私は教員にとって最も大切な資質の1つは学び続ける姿勢であるように思う。現状の自分に不満と危機感を抱き、私が在学していたときとは授業のスタイルを大きく変えられた先生がいらっしやう。その先生は毎日欠かさず机に向かう時間を作り、勉強会に参加するなど努力を続けられているそうだ。教員という立場に満足してしまうのではなく、常に上を目指して努力を続けることは教員として当たり前のことなのだとおっしやうしていた。こうした現状の自分に満足せず、常に何かを学ぼうとする姿勢が生徒たちの心に学問の楽しさを伝えるのではないだろうか。